

育児文化の史的考察

—現代育児書の変容を通じて—

木本尚美

(広島女子大学)

1, 目的

育児は科学としてだけにとらえられがちであるが育児は本来文化であり、昨今の家庭のありようで育児の周辺を考えるとときもっと文化的背景にも目を向ける必要があると思われる。そこで我が国における育児文化の変遷を解明する基礎的研究の一つとして、現代読み継がれている育児書の最近の変容を考察する。

2, 方法

松田道雄の軌跡は戦後日本の育児思想の歩みの一方向を示している。中でもロングベストセラーといわれる「育児の百科」(岩波書店 1967年初版)は改訂を重ね、「最新育児の百科」(1994年)として今日も信頼に値する価値ある育児書と多くの支持を得ている。本書は単なる方法論や育児情報を満載しただけのものではなく新しい家庭のあり方を論じ、日本の育児文化と伝統を尊重しようという思想がおりこまれているから読み継がれていると考えられる。初版から最新版に至る27年の間には高度成長のひずみ、公害や自然破壊、子どもの諸問題が出現し、我が国の社会生活は急速な変化をとげた。世代が違えば育児の常識も変わってくる。育児もまた歴史を内包した社会・文化の影響と無援のものではない。60年代の初版との比較において90年代最新版に加筆されたものは新たな育児思想の指標と考えられる。そこでその間の育児文化の推移を考察してみる。

3, 結果と考察

①核家族における育児の壁

松田は現代の育児環境を「出産をどううまくやっていくかが核家族のなかで市民的自由を楽しんでいる新しい夫婦の時代的課題」ととらえている。核家族内で母親は昔に比べて大変自由になった。反面自分の才覚で育児方法を決定しなければならない現状がある。つまり育児に良識が求められるようになったということである。しかし望めば何でも手に入るような錯覚に満ちた豊かさや自由を信じ、欲望は満たされるものという幻想が若い母親の育児不安を助長しているのではあるまいか。松田は「育児ノイローゼは核家族時代の犠牲」とみなし、「父親の協力なくては母親一人では背負いきれない」と断言している。家族の規模が小さく

なればなるほど内面的支援も含め、親になるための準備教育がこれまで以上に必要になったということである。子どもを育てるということは家庭の一貫作業である以上当然夫婦共同の仕事と見なさなければならない。最新版では出産までの母胎の異変・諸注意が新規掲載され、母親になる人の心理状態が胎児に影響するということが強調されている。すなわち子どもと母親との相互作用は出生以前から既に始まっており、生まれてくる子どものことを第一に考え、母親は精神的に安定した状態で過ごすということが重視してある。そのような母親を背後で支える父親の役割が新たな育児文化といえよう。だからといって“夫立ち会い出産”なるものは単なる風潮にすぎず、夫に付いていて欲しいと思わせるほど妊婦を孤立無援にする産院側に問題があるという批評は松田らしい。

10ヶ月の胎内での期間は母子心身一体の時であり例えば母親の禁煙量、飲酒量と早産、低体重出生、周産期死亡率には関連があり、父親の喫煙によってすら胎児に悪影響を及ぼすということが繰り返して述べてある。人間の一生を考えるととき出生前の環境を考慮することも産まれてくる子にとっては大切という育児思想が提示されている。

女性の就労が社会の必要に応じるにつれて育児と教育はますます家庭外に依存される傾向にある。「外で働く人の出産」や「産休開けに勤めに出る母親に」という項目が新設されている。母親の就労は男性である父親にも大きな問題であり、家庭外育児システムの充実に要求する前に夫と妻が協力しあえないと初期のしつけや教育はやれないことが力説してある。家庭の維持は世紀の問題であるとし、時代が父親に家事・育児の参加を要請しており、もはや父親となる人が手を貸すしかない状況の認識を求めている。現代では男性も出産で仕事を休むという現実があり、古い時代の風習に基づいてできた古い思想は捨てて、時代が変わったという意識変革が父親に要請してある。特に子どもの出生直後に「父親になった人に」とか「父親のすること」という項目が新設され、育児は父親と母親の共同作業と位置付けられている。また保育園も新しい時代に合うものでなければならぬとみなし、特に母子間

の緊張を適度に和らげる集団教育の場として保育園は意義深いものがあり、集団保育によって家庭教育を補なう育児が指摘してある。そして保育園に預けた最初の1年を父親が協力すれば切りぬけられると夫の協力がここでも強調してある。一方社会の管理が強まるほど、子どもにとって自由な世界としての家庭の必要は大きいとみなし、延長保育は親の都合であって子ども本位の考え方ではないとして、長時間保育が可能であったとしても保育時間は短いにこしたことはないと言家庭尊重の立場をとっている。

②育児の簡略・効率化

基本的に育児はなるべく楽にやりたいというのを松田は趣旨としている。旅行中は紙おむつというのも簡易さから便利さへ手段として推奨している。またベビーフードによる離乳食やリース用品の利用を促し、利便性を有効に活用して子どもとのふれあいを優先させることを勧めている。しかし育児の自由競争社会に母親は無力で外的刺激に引きずられやすい。親はあふれる情報に対しとまどいとストレスから営利事業に乗せられる傾向にあることも直視している。産院で出産するようになったのも母乳が出なくなった遠因であり、文明の1つの副作用かもしれない。里帰り分娩の増加により、子ども連れの自動車や航空機による旅行が増えた。安全ベルトのかけ忘れや子どもを車内に放置して過熱死させる事故は近年特に目に付くものとし、至便さの持つ裏側の部分にも思いを馳せる必要を強調している。また若い親の乗用車によるレジャーが盛んなことに関しては、楽しみたい大人の個人主義であって子どもが選んだものではないとみなし、些細な欲望を優先させる親の無頓着を述べた上で、親自身が自らの欲望を管理できていないことを指摘している。加えて家庭内で多発する子どもの不慮の事故は親の不注意によるものが多く、屋内外に限らず親の都合で子どもを一人にする頻度が高くなったのも危険な現象としている。目が行き届かないことが子どもの事故につながるという認識の必要性を繰り返し述べている。さらに子どもに与えるテレビの影響に対しては終始否定的であり、まずは親がテレビを見ないようにすることを勧めている。

③寛容な育児態度

日常から子どもに注意深く目を注ぐことを力説しているものの、育児には必ずしも最高の知識が必要でなく、むしろ経験を自信にしたおおらかな育児態度を良としている。母子の円滑な交流源である母乳の価値を強調しながらも未だ残る母乳信仰や全人工栄養に対し

ては母親が不当に自分を苦しめることのないように対処してある。それよりも子どもを太りすぎにさせないこと、もはや大きければいいという時代ではないことを述べている。夜泣き等子どもの気になる症状については成長とともに直るものだから不自然なことはしない、子どものことを一番良く知っているのは母親だからという自信を持つことを説き、子どもを自立させるためには母親の自立が先決としている。育児相談によくある離乳の進め方も方法は一つではないし焦って無理強いしない、あり合わせの大人の副食で十分としているものの、インスタント食品で育った若い世代は、家庭内で離乳食代わりになりそうなものを調理していない現状を批判している。さらに排泄訓練に代表されるしつけを通じての基本的生活習慣の獲得が課題となるが、4,5ヶ月からの排泄のしつけはまだ早く、その過程でおきる親と子の葛藤・衝突の段階で親の寛容性と適切な統制が子どもの発達に影響するとしている。ある程度の楽観と寛容の姿勢が必要で、強制や体罰は厳禁され無理は逆効果とみなされている。うまくいったときは賞賛し、失敗したら断念して次の機会を待つという方法は歩行や食事のしつけの場合も同様のやり方であった。基礎習慣をしつけるときあせって強制にならないようにしないと子どもの自発性を失わせることになり、マニュアル通りにはいかないということを力説している。以前の日本には子どもが泣けば時と所を問わず乳を含ませる育児文化があった。時間に区切りをつけ、区切りまでに解決しようとする焦りと子どもの個性を無視して事を運ぶ急ぐ育児は問題とみなされている。子ども本位に考えるならば待つ育児ということであろう。楽天的やり方を薦めることで育児不安の解消と自信の回復につなげている。取り立てて問題にすべきでないという信念を持つ育児文化の構築と育児感覚の基本的視座とが親に望まれている。

4, まとめ

もはや伝統から切り離された若い母親は、育児の壁を前に親になること事態に不安感があるばかりでなく、子どもへの関心が稀薄になり目配りに怠慢な点がみられる。相談相手を失った母親への支援は家族形態からも求められている。育児に対する考え方の多様化がいわれるが、子どもの人格発達のために安定した家庭環境は不可欠である。今日における育児にも正常な家庭環境の保証、父親と母親の一体感、育児の良識が必要なこと等が示されている。